

### 移り変わりの激しい韓国の足跡をのぞいてみませんか？

奥田 聡

一九八五年に学卒でアジ研に入所し、韓国研究を拝命して三〇年が経過した。二〇一二年九月にアジ研を退職した後も国内客員研究員としてアジ研での活動を許され、アジ研どっぷりの生活を続けている。

私がアジ研での研究生生活をスタートさせた頃、韓国に関する資料を入手するのは容易ではなかった。新人研修で図書館の紹介があり、閉架の書庫を案内してもらった。いくつもの書架が韓国語書で埋め尽くされていたのは度肝を抜かれた。鉛色に変色した解放直後の本から最新の資料までバリエーションが豊富であった。とくに非売品の政策資料の類がところ狭しと並んでいたのが興味深かった。

入所二年目、私は今は亡き服部民夫主査の率いるアジア工業化プロジェクト・韓国パートに参加する機会を得た。私に与えられたのは一九六〇年代以来の韓国経済発展のバックボーンとなった経済開発計画のサーベイであった。

ここで、アジ研図書館の蔵書が威力を発揮することとなる。早速蔵書を調べてみると、過去の計画書や評価報告書がほぼすべて揃っていることがわかった。関連資料を借りて読み込んでいくうちに、野心的な目標を曲がりなりにも次々と実現していった韓国の力強さが深く印象付けられた。

こうして、私は人生初の海外旅行となる韓国での現地調査に臨んだ。服部主査のカバン持ちとして三週間、韓国各地を回った。先輩研究者

のやり取りを理解するだけでやっとであったが、時にはこちらに話が振られることもあり、その際には事前の読み込み調査で疑問として残った点について現地の碩学に教えを請うことができた。その際、年配の学者がみせた怪訝な表情が忘れられない。「君、昔のことに詳しいようだが、どこで勉強したのかね？」と。この問いに私は「うちの図書館の資料で勉強しました」と臆面もなく答えたのであった。

月日が流れ、インターネットが普及してくるとネット上に夥しい量の情報が載せられるようになり、紙の本を渉猟せずとも必要とする資料をブラウザで簡単に検索・閲覧できるようになった。韓国関連の情報も同様で、かつては現地調査によらなければ収集できなかったような情報も日本国内でリアルタイムに入手できるようになった。ネットの普及にともなって韓国出版業界の苦境は一層深刻となり、良書に出会うことも少なくなった。こんなこともあって、アジ研に奉職し、また退職後も出入りしながらも、いつしか図書館から足が遠のいたのは事実だ。それでも、アジ研図書館の魅力は尽きない。収集した資料は基本的に永久保存されるため、ネット時代以前の資料の宝庫だ。とくに、韓国関連の資料はその方面で日本屈指のライブラリアンの花房征夫氏が心血を注いで集めたものだ。魅力の一つは地図だ。韓国の過去の地図、とくに独立後の変容についてはフォローに苦労する。変化が激しかったソウルについてはその拡

大の様子や市内の主要スポットの来歴などを知ろうとすれば地形図よりも詳細な都市図が欠かせないが入手が難しく、とくに急速な拡大を遂げた一九五〇年代末から七〇年代にかけての様子を伝えるものは断片的にしかなりていない。アジ研図書館の所蔵品でお薦めなのが「最新ソウル特別市街図」（韓公地図工業社、一九六八年刊）である。今は漢江の南側の江南やソウル市外に移転してしまった学校や政府機関、企業の本社が江北の旧市街に固まっている様子や、今はマンションが林立し、おしゃれなカフェが並ぶ江南がのどかな田園地帯であったことなどが手に取るようにわかる。韓国が重化学工業化へと跳躍する直前の息吹が感じられる一品だ。

もう一つは独立前後の資料である。この時期の資料は戦乱で散逸しているものも多いが、アジ研図書館には相当数の蔵書がある。朝鮮の解放直後の経済的混乱を当時の情勢分析と苦労して集めた統計で詳述した「朝鮮経済年報」（朝鮮銀行調査部、一九四八年刊）がお薦めだ。国土の分断、日本との絶縁、中国の内戦などで販路を絶たれ、日本人引き揚げや電力不足で生産もままならないなか、インフレだけが高進する極限状況が描かれている。

今や韓国は世界の主要工業国の一角を占め、二〇〇〇年代に入って盛り上がりを見せた韓流は、いまだアジア各国で根強い人気を保つ。でも、そこに至るまでの韓国人の足跡をアジ研図書館でのぞいてみませんか？

（おくだ さとる／アジア経済研究所国内客員研究員・亜細亜大学アジア研究所教授）